

## 「きみにならびて野にたてば」

きみにならびて野にたてば、  
 柏ばやしをとゞろかし、  
 風きらかに吹ききたり、  
 枯葉を雪にまらばしぬ。

げにもひかりの群青や、  
 鳥はその巢やつくるはん、  
 山のけむりのこなたにも、  
 ちぎれの艸をついばみぬ。

## 語注

きみ 下書段階のタイトル「ロマンツエロ」や、下書稿(一)の内容からすると、女性であることは間違いなさそうだがモデルは不明。「文語詩稿 五十篇」の二三番目にある「流水」を論じた際にも指摘したように、どちらも下書段階で「ロマンツエロ」と題された作品であり、関連すると思われる作品も数多い。虚構も交えているのだろうが、季節や舞台、テーマ等に共通するイメージが多く気になるところである。

げにも 副詞の「実に」であろう。まことにそのとおりだ、の意。

ひかりの群青や 栗原敦(「プロムナードノ光と風のことば」)詩が生まれる

ところ』・平成十二年九月・蒼丘書林)は、これを「(雪)けむり」が山腹のどこかに作る「群青」色の影」ととらえ、「影」を表すのに「ひかり」を用いて示して「いるのだとしている。下書稿(一)に「北面に藍の影置けるノ雪のけむりはひとひらの」とあることから、そう解釈したのだろう。ただ、一行目から順に読み進め、「ひかりの群青」という言葉に至った時、それが後の句にある「山のけむり」によるものであることを理解するのは難しい。まして一般には「影」と呼んでいるものこのことを、「ひかり」と書いていたのであれば、なおさら難しいのではないだろうか。むしろ下書稿(一)の第四連の「あゝさにあらずかの青きノかゞやきわたす天にしてノまこと恋するひとびとのノとはの園をば思へるを」を下敷きにして考えると、青天を意味していると捉える方が自然であるように思う。そしてこの青天は、ただの青空を意味するだけでなく、「此方」に対する「彼方」にある世界、すなわち生きとし生ける全ての存在が永遠に愛し合うことのできる理想的な空間をも意味しているのだと思う。

山のけむり 下書稿(一)に「峯の火口にたゞなびきノ北面に藍の影置けるノ雪のけむりはひとひらのノ火とも雲とも見ゆるなれ」とあることから、火山(岩手山?)の煙のようにも思えるが、実際は「雪のけむり(雲)」だったようだ。

## 大意

きみに並んで野に立つと、風がきららかに吹いて来て、柏ばやしをざわつかせ、枯れ葉を雪の上にくるくると舞わせている。

ああ、たしかにそうだ。群青色の青空に白い雲が浮かんでいる世界だけでなく、こちら側の世界でも、鳥がその巢を修復している最中なのだろうか、ちぎれた草を啄ばみ、愛の喜びに浸っているところである。

## 評釈

「雨ニモマケズ手帳」の一三三・一三四頁に下書稿(一)、黄野(220行)詩稿用紙に「口

マンツェロ」と題された下書稿(二)、そして定稿が現存。生前発表なし。

先行研究には儀府成一「愛の詩」(『宮沢賢治 その愛と性』・昭和四十七年十二月・芸術生活社)、小倉豊文「きみにならびて野にたてば」(『雨ニモマケズ手帳』新考)・昭和五三年十二月・東京創元社)、佐藤勝治『宮沢賢治青春の秘唱』冬のスケッチ”研究 増訂版”(昭和五九年四月・十字屋書店)、栗原敦(前掲)などがある。

下書稿(一)の第三連に「さびしや風のさなかにも／鳥はその巢を繕はんに／ひとはつれなく瞳澄みて／山のみ見る」ときみは云ふ」とある。ここには赤鉛筆で×印が付され、初期の段階から削除の意向が示されていたことがわかるが、巢を繕う鳥の姿と人間たちの愛の営みを対比しようとした意図自体に変化はないので、下書稿(一)の持っていた直接性は失われたにしても、アイディア自体は定稿でも生きていたと考えていいだろう。

「げにも」と、自己確認しているのは、空の彼方の理想郷における永遠の愛のことばかりを観念的に考えていた「男」であり、これは彼が愛の営みは空の彼方ばかりではなく、地上の世界のあちこちでも行われていることを改めて確認した際の言葉なのである。

では、賢治がここで地上の愛を称えていることは、かつて「正しいねがひに燃えて／じぶんとひとと万象といっしょに／至上福しにいたらうとする／それをある宗教情操とするならば／そのねがひから砕けまたは疲れ／じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいっしょに行かうとする／この変態を恋愛といふ(小岩井農場)」と書いたことと矛盾しないのだろうか。栗原敦は「地上の愛の営みに引かれる心を牽制するもうひとつの心の存在が強く暗示されている」としているから、本作を「小岩井農場」の方向で捉えようとしているようだが、晩年の賢治は森莊己池に向かつて「禁欲は、けっきょく何にもなりませんでしたよ、その大きな反動がきて病気になったのです」と語り、また「草や木や自然を書くように工口のことを書きたい」とも語ったという(昭和六年七月七日の日記)・『宮沢賢治の肖像』・昭和四九年十月・津軽書房)。人間力タログとも言うべき「文語詩稿」には、森への言葉を現実化させたような艶笑譚めいた作品があることから、作中人物が宮沢賢治本人とどれだけ似ているのかどうかはともかく、少なくとも本作は地上の恋愛を賛美する方向で解釈していいのだらうと思われる。

## 初七日

落雁と黒き反り橋、

かの児こそ希ひしものを。

あゝくらき黄泉路の巖に、

その小き掌もて得なんや。

木綿つけし白き骨箱、

哭き喚ぶもけはひあらじを。

日のひかり煙を青み、

秋風に児らは呼び交ふ。

### 語注

**落雁** 穀物の粉に水飴などを混ぜて練り、型に入れて焙炉で乾燥させた干菓子。

**反り橋** 小沢俊郎は「新修全集第六巻月報」の「語注」に「晒餡・砂糖・微塵粉を原料とする蒸し菓子。弓形に反った橋(反橋、輪橋)の形。現在は製造されないと書いている。原子朗(一)ことは、きららかに 賢治の文語詩を読む」・『十代 十七十二』・平成九年十二月(一)は、「黒ゴマをまぶしたお煎餅のような駄菓子。昔の駄菓子屋で売っていました」と書いている。

**黄泉路** 黄泉への道、すなわち死後の世界への道のこと。ちなみに「文語詩未定稿」に「黄泉路」というタイトルの詩があるが、関係は見出せない。

**煙を青み** 文語文法では「を 青み」は、「瀬を早み」や「風をいたみ」のように原因や理由を表す時に用いられる。ただ、この場合は原因・理由を述べているとは考えにくいので、「日光が煙を青める」という意に取りたい。

## 大意

初七日の法事で出された落雁と黒い反り橋……、今は亡き、あの子こそこれを喜んだはずなのに。

ああ、暗い黄泉の国への岩だらけの道で、あの子はお菓子を手にすることができたのだろうか。

木綿の布で覆われた白い骨箱の前に、人々は泣き叫んではいるけれども返事は戻ってこない。

線香の煙に日差しが青く注ぎ、秋風に向かって子どもたちはその子の名を呼び合っている。

## 評釈

黄野（260行）詩稿用紙に「初七日」と題された下書稿（一）、その裏面に「法事」と題された下書稿（二）、黄野（220行）詩稿用紙に「悲歌」と題された下書稿（三）、そして定稿の四種が現存。生前未発表。

先行研究には、原子朗（前掲）がある。

好きなお菓子も食べられないような、あまり裕福ではない家の子ども初七日の法事の様子を描いた悲痛な作品。それなのに、たくさんの菓子が配られており、そこに一層の悲哀感、やるせなさが漂っている。

下書稿（一）の改変過程には、法事に集まった子どもたちがお菓子をもたらすと、「児らはみな得持てはしりぬ／その児こそねがへるそれを」と、友人を失った悲しみではなく、お菓子をもたらって喜びはしゃぎまわる子どもたちの現実的で酷薄な様子を描いているとも受け取れる二行があったが、それを削除し、

胸おそれくちびるあせて

うちすがりいだきしことの

まこととはなほ思ほえぬ

胸あえぎ唇あせて

去りにけるその児のゆゑに

かくて児らつどふはかなさ

その児だにねがはんものを

と、子どもらの酷薄さではなく、その子が死んでしまった後にたくさんのお菓子を他の子どもが手にしているという人生というものの自体の非情さ、酷薄さを強調するように改変されている。

続けて

そのくにの菓をし得なんや

かの小きたなごころをもて

この世なる菓をしとらんや

そのことのなんぞさびしき

なべてみなかの児と餐せば

かの児またよみぢに食せん

とあるが、おそらく賢治は、実際にこうした現場に居合わせた経験があるのだろう。いつ、どこの話であるのかはわからないが、「永訣の朝」における最終部分、すなわち「どうかこれが天上のアイスクリームになつて／おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに／

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」となべてみなかの児と餐せば、かの児またよみぢに食せん」の発想が類似しているように思えてならない。どちらも甘いお菓子を媒介にして、地上の命と天上の命の繋がりが示唆されていることが共通している。下書稿の「胸おそれ」「胸あえぎ」という言葉から、この子は肺の病気で亡くなったのだと思われるが、もしかしたら賢治は、この時、若くして肺病で亡くなった妹トシを思い出していたのかもしれない。

## 「林の中の柴小屋に」

林の中の柴小屋に、醸し成りたる濁り酒、一筒汲みて帰り来し、  
むかし誉れの神童は、面青膨れて眼ひかり、秋はかたむく山里を、  
どてら着て立つ風の中。西は縮れて雲傷み、青き大野のあちこちに、  
雨かとそゞぐ日のしめり、こなたは古りし苗代の、刈敷朽ちぬと水黾き、  
なべて丘にも林にも、たゞ「鳴」る松の声なれば、あはれさびしと我家の、  
門立ち入りて白壁も、落ちし土蔵の奥二階、梨の葉がざす窓べにて、  
筒のなかばを傾けて、その齒に風を吸ひつゝも、しばしをしんとものおもひ、  
夜に日をかけて工み来し、いかさまさいをぞ手にとりにける。

## 語注

**濁り酒** 字義としては酒糟を濾していない白く濁った酒のこと。しかし、ここでは自家で密造した濁酒のこと。酒を自家醸造するのは農民の楽しみの一つであり、特に東北地方にその傾向が強かった。理由はさまざまにあるが、清酒一升が玄米四升分の値段だったこと、そして濁り酒なら屑米からでもできたことなどが主な理由だったのだろう。そもそも、明治三十二年一月に濁り酒の製造が禁止されたのは、酒造業者の保護と、日清戦争後の増税計画の一環でしかなく（酒税による租税収入は地租を超えてトップとなった）、実際、仙台税務監督局の間税部長であった大平正芳元首相も「東北地方におけるかような貧乏な百姓は、国家の恩恵を全く受けない反面、徴税という名においてかかる桎梏に苦しんでいるのである。私は国家とか国法というものにまつわる冷厳な約束というものに、ある種の反発を感じた」と書いているように、税金を取る側の人間にさえ無慈悲な法律に思われていたようである（『宮沢賢治の農民観を知るために 復刻「濁酒に関する調査（第一報）」・平成十年八月・センドード賢治の会』。賢治は「藤根禁酒会へ贈る」にも明らかのように、酒を嫌っていたことは有名だが、農民たちにとってほとんど唯一の楽しみであった濁り酒を作り、飲む自由を奪うことにはかなり同情的だったようだ。

**日のしめり** 夕方の太陽光線の降り注ぐ様子を、雨が降り注ぐ様子に見立てたことから生まれた表現か。

**刈敷** 山野で刈り取った柴草を田畑に敷いて肥料とすること。あるいは肥料そのものこと。緑肥とも言う。

**いかさまさい** 賭博用に細工したサイコロ。

## 大意

山野で刈り取った柴草を蓄える林の中の小屋から、ひそかに醸造していた濁り酒を一筒だけ分け持って帰ってくるかつての神童は、青膨れした顔に眼光だけが鋭く、日の傾いた秋の山里を、どてらを羽織って風の中に立っている。

西の空には縮れ雲が浮かび、青い大野原のあちこちは、雨かとも見まごうように陽光が降り注ぎ、手前では古い苗代に刈敷がよく腐って水も黒く、丘や林には松の木の間に吹き抜ける風の音が響く。ああうら寂しいと思っただけ我が家の門をくぐると、白い塗り壁の剥げ

落ちた土蔵の奥二階に上がり、梨の葉を飾りつけた窓辺で、持ち来たった濁り酒の筒を傾け、酒を口に含んだまま齒の間から息を吸い込み、しばらく何も言わずに物思いにふけり、夜昼となく丹念に細工を施した賭博用のいんちきサイコロを手にとってみる。

## 評釈

『新校本全集』には、「口語詩「密醸」を文語詩に改作したものである」とあり、その下書稿の余白にあつた断片を下書稿(一)としているが、密造酒が話題に上っているという点と以外に本作とテーマ・登場人物・場面・言葉などに共通点が見出しにくく、同一の用紙に書かれたこともないことから、下書稿(一)は、本作とは関係なく、「文語詩 未定稿」にでも分類すべきものであるうと思われる。

下書稿(二)以降の先行作品は、口語詩「法印の孫娘」。下書稿(二)は黄野(44行)詩稿用紙に書かれた口語詩下書稿の余白に書かれ、下書稿(三)はその上に重ね書きされている。そして定稿が現存。現存稿は『新校本全集』では四とあるが、三とすべきだろう。生前発表なし。

先行研究に対馬美香「賢治作品に見る郷土史 岩手県の「酒」と「馬」をめぐる」(『宮沢賢治新聞を読む 社会へのまなざしとその文学』・築地書館・平成十三年七月)、近藤晴彦「死の視点」(『宮沢賢治への接近』・河出書房新社・平成十三年十月)。  
先行作品だと考えられる「法印の孫娘」は次のとおり。

ほっそりとしたなで肩に  
黒い雪袴モッペとつまごをはいて  
栗の花咲くつゝみの岸を  
むすめは一人帰って行った  
品種のことも肥料のことも  
仕事の時期やいきさつも  
みんなはつきりわかつてゐた  
あの応対も透明で

できたら全部トーカーにも「撮」って置きたいくらゐ  
栗や何かの木の枝を  
わざとどしやどしや投げ込んで  
おはぐるのやうなまつ黒な苗代の畦に立って  
今年の稲熟の原因も

大てい向ふで話してゐた  
今日もじぶんで葉書を出して置きながら  
どてらを着たまゝ酔つてゐた

あの青ぶくれの大入道の  
娘と誰が考へやう

あの山の根の法印の家が  
あそこはバグチと濁り酒どの名物すと  
みちを訊いたらあの知り合ひの百姓が云つた  
それほど村でも人付合ひが悪いのだらう  
もつとも「ば」くちはたしかにうつ

あの顔いろや縦の巨きな頬の皺は  
夜どほし土蔵の中にでも居て  
なみなみでない興奮をする証拠である  
ぜんたいあの家といふのが

巨きな松山の裾に  
まるで公園のやうなきれいな芝の傾斜にあつて  
まつ黒な杉をめぐらし

山門みたいなものもあれば  
白塗りの土蔵もあり  
柿の木も梨の木もひかかってゐた  
それがなからもう青じろく蝕んでゐる  
年々注意し作付し居り候へ共  
この五六年毎年稲の病氣にかゝりと書いた  
あの筆跡も立派だったか  
どうしてばくちをやりだしたのか  
或ひは少し村の中では出来過ぎたので  
つい横みちへそれたのか  
或ひはさういふ遣伝なものか  
とにかくあのしつかりとした  
新時代の農村を興しさうにさへ見える  
うつくしく立派な娘のなかにも  
その青ぐるい遣伝がやっぱりねむってゐて  
こどもか孫かどこかへ行つて目をさます  
そのときはもう濁り酒でもばくちでもない  
一千九百五十年から  
二千年への間では  
さういふ遣伝は  
どこへ口火を見付けるだらう  
西はうすい氷雲と青じろいそら  
うしろでは松の林が  
日光のために何かなまこのやうに見え  
わづかに沼の水もひかる

賢治の元に稲作の相談に訪れた娘の理知的な様子と、祖父（法院）の破戒ぶりのアンパランスが描かれているが、文語詩定稿に至ると娘の姿は全く消え去り、農村に巣食った小悪党を描くことが主題となっている。

文語詩では土蔵の中にまで賢治が入り込んでいようだが、これは映画の「長回し」のように、柴小屋から濁り酒を取り出し、門をくぐつて、土蔵の二階に上がり、筒を傾けるところまでを上方からカメラが撮っているようである。口語詩「法印の孫娘」では、娘の様子を「できたら全部トーカーにも「撮」って置きたいくらい」と書いていたが、果して賢治は、文語詩の段階で、破戒僧の方の一挙手一投足を撮影することにしようか。

そして、もう一つ気になるのは独特の詩形である。本作は「文語詩稿 五十篇」の中で最長。「文語詩稿 一百篇」を合わせても一、二を争うほどの長編であるが、七五調で「法印」の姿を追いかけながら、最後の句を七（八）・七で終わらせているあたりは、長歌を意識しているのだろう。

つまり本作は、近代的な映画的描述方法と古典的な長歌の方法が融合された意欲作だということになるのだろう。ただ、他の文語詩に比べると凝縮度が低く、冗長すぎる印象も拭えない。

近藤晴彦（前掲）は、「主人公を適当に滑稽化して歌舞伎の三枚目に仕立て」た「甚句風の調子よい作品」としているが、たしかにそうしたおだやかなおかしみの表出には成功していると言つていいだろう。従つて、本作を「法印」の宗教意識への疑いや、倫理観の欠如に対する告発を読み取るべきだと考えるのは大げさだし、濁り酒の密醸やインチキ賭博についても、特にとがめだてしているわけでもあるまい。近藤は「作者の自画像が映し出され」ていると言つが、それも大げさ過ぎる気がする。何よりも、大正・昭和の岩手に生きる人々の姿を、ユーモラスに、愛すべき人間として造形することに本作品の意図はあったのだと思う。

## 「水霜繁く霧たちて」

水霜繁く霧たちて、  
馬はこむらをふるはしぬ。

すすきは濡<sup>そほ</sup>ぢ幾そたび、

(荷縄を投げよはや荷縄)

雉子「鳴」くなりその雉子、  
歩み漁りて叫ぶらし。  
人なき家の暁を、

## 語注

水霜 「みずしも」と読む。晩秋の頃、露が凍って霜のようになったもの。つゆじも。  
こむら ふくらはぎ。

雉子 人里近くに住む留鳥のキジのこと。ただし、音数の関係から、ここでは下書稿にルビをふっているように「きぎす」と読ませたかつたのだろう。鋭く、高く、しわがれた声でケーン、ケーンと鳴く。日本の国鳥であり、岩手県の鳥でもある。

## 大意

水霜がはなはだしく霧もたちこめている早暁に、すすきは露にぬれて、何度も何度も馬はふくらはぎをふるわせている。

「荷縄を投げろ、早く荷縄を…」

キジは声高く鳴きながら、すでに人の出払った早暁の家の中を、何かを漁るように歩きながら叫んでいるようだ。

## 評釈

0 口語詩「七三九 「霧がひどくて手が凍えるな」を文語詩に改作したもの。黄野(2行)詩稿用紙に書かれた口語詩の下書稿に重ね書きされた下書稿(一)と定稿が現存。生前発表なし。先行研究なし。

定稿用紙に書かれた本作を見て気がつくのは、それぞれの聯の句の数の不統一と、定稿で、第二聯と第三聯の間が大きく開いた不規則さである。第一聯と第二聯の間は三行しか空いていないのに、第二連と第三連の間は十行もあり、定稿用紙は一枚全部で二十六行しかないことから考えると、極めて異様である。第一聯、第二聯とは時間的にも空間的にも離れた場所で事件(キジが歩いたということ)が起こったことを示そうとしてのものである。元になった口語詩は次のとおり。

七三九 「霧がひどくて手が凍えるな」

霧がひどくて手が凍えるな

……馬もぶるつともをさせる……  
縄をなげてくれ縄を

……すすきの穂も水霜でぐっしょり

あゝはやく日が照るといゝ……

雉子が啼いてるぞ 雉子が

おまへの家のなからしい

……誰も居なくなつた家のなかを

餌を漁つて大股にあるきながら

雉子が叫んでゐるのだらうか……

文語詩への改作がとても素直に行われたことがわかる。

賢治はこの年の春、下根子・桜で独居自炊の生活を始め、取り入れの季節が近づいた農村の風景を期待と緊張を込めて見守っているようである(口語詩「七四〇 秋」一九二六、九、二三)には、「恐れた歳のとりいれ近く」とある。「おまへの家」とは、花巻農学校（現 盛岡大学）の教え子でもあつた隣の伊藤忠一の家で、飼われていた馬も多くの作品の登場している。

### 30 「あな雪か 屠者のひとりは」

「あな雪か。」屠者のひとりは、 みなかみの闇をすかしぬ。

車押すみたりはうみて、 えらひなく橋板ふみぬ。

「雉なりき青く流れし。」 声またもわぶるがごとき。

落合に水の声して、 老いの屠者たゞ舌打ちぬ。

#### 語注

**屠者** 獣畜類の屠殺を業とする人のこと。日蓮は自ら「海辺の旃陀羅（せんだら）（漁師）が子」と名乗っていたが、これは『妙法蓮華経』の「是の如き人は、復世樂に貪著せず、外道の経書、手筆を好まじ。亦復喜ひて其の人、及び諸の悪者、若は屠兒、若は猪羊、鶏狗を畜ふもの、若は獵師、若は女色を銜売するものに親近せじ」(島地大等『漢和对照 妙法蓮華経』・「普賢菩薩品第二十八」)といった言葉を踏まえてのものだろ。龍樹の『大智度論』には、屠者の家に生まれた子が、成人した後も家業を引き継ぐのを嫌がり、父母が刀と羊を与えて家に幽閉したところ、自刃して天上に生まれたという記述があるが、賢治はもちろんこれらの「屠者」観に通じていたと思われる。ちなみに「銀河鉄道の夜」に登場し、賢治自ら日本語の歌詞をつけたことでも知られる「新世界交響楽」を作曲したアントニン・ドヴォルザーク(一八四一―一九〇四)は、宿屋兼肉屋の跡取息子として育つが、家業を嫌って作曲家となっている。

うみて 飽きて疲れて。

えらひなく 『新語彙辞典』は「えらい」の項目で、「答え」の古い表現「応へ」(い  
らえ)の東北訛り」としている。

わぶる 気落ちする。

**雉** 人里近くに住む留鳥のキジのこと。定稿の段階で山鳥の「山」と書いたのを「雉」に訂正している。作品内の論理が要請したものだと考えられることもできるが、この前に収められている「水霜繁く霧たちて」にも「雉子」が登場していたことから考えると連作的な意図もあつたのかもしれない。ただし、本作では音数の関係から「きじ」と読ませたかつたのだらう。

## 落合

川の合流点。佐藤勝治『宮沢賢治青春の秘唱 冬のスケッチ』研究 増訂版』（昭和五九年四月・十字屋書店）は本作の先行作品である。「冬のスケッチ」の該当部分について、「この橋は作者の生家に近い豊沢橋であることが判明する。なぜかといえば、豊沢橋の下手二〇〇メートル程の川岸にと殺場があり、そのと殺場のすぐうしろに豊沢川が北上川にそそぐ落合があったからである」と書いている。確かに『宮沢賢治生誕百年記念特別企画展図録・拡がりゆく賢治宇宙』（宮沢賢治イーハトーブ館・平成九年八月）所載の「大正期の花巻地図」にも、賢治の生家からほど近い豊沢川原に「屠殺場」の文字が見出せるが、本作の舞台を豊沢橋であったとすると、そのすぐ西側に大堰川と滝の沢川が豊沢川に合流する地点があり（「大正期の花巻地図」・前掲）、ここならば橋からも「水の声」は聞えたように思う（現在は大堰川のみがここで豊沢川に合流しているが、水量も乏しいことから、豊沢橋を渡ってみても、水音は自動車の音にかき消されて、とても聞くことはできない）。



豊沢川に流れ込む大堰川（豊沢橋から 2004・8・19）

## 大意

「あ、雪か。」屠者の一人は、川上の暗闇を透かし見て言う。

荷車を押す三人は仕事に疲れているのか、答えもせずに橋板を踏む。

「雉だった。青く流れたのは。」と、男は気落ちしたような声でまたつぶやく。

聞えてくるのは川の合流点からの水の音、そして年嵩の屠者はただ舌打ちをするばかり。

## 評釈

「冬のスケッチ」の第二五葉右半に下書稿(一)、既使用赤野詩稿用紙の裏面に下書稿(二)、その余白に下書稿(三)、定稿。生前発表なし。

先行研究には島田隆輔「宮沢賢治・文語詩稿五十篇ノ詩系譜の論へ(下)」(『翔けりゆく冬のフェノール』試注から)(『論叢宮沢賢治2』・平成十一年三月・中四国宮沢賢治研究会)、水上勲「宮沢賢治文語詩に関する二、三の問題」(『帝塚山大学人文学部紀要1』・平成十一年十一月)、村上英一「あな雪か 屠者のひとり」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』・平成十二年九月・柏プラーノ)などがある。

「冬のスケッチ」に書かれた下書稿(一)は、

きりあめのよるの中より

一すじ西の青びかり、

はじめは雪とあざわらひ

やがては知りつ落ちのこり

薄明穹のひとかけと

ほのかにわらひ人行けり

というもので、ここに「屠者」の姿はない。また、雪と見間違えられたものは「落ちのこり」だった。「薄明穹のひとかけ」であるとされていた(薄明穹とは賢治がよく使う言葉で、日の

出前、または日没後に太陽光線が大気中の微細物に乱反射して空がほのかに光る現象のことで、それが「落ちる」という表現は、歌稿Aの「薄明穹まつたく落ちて燐光の雁もはるか西にうつりぬ（七六二）」などがある。

新校本全集には書いてないが、これに連続して書かれた「（冬のスケッチ）」二五葉に

これはこれ、はがねをなせる

やみの夜のなつかしき灰いろなり

そらよりは霧をふらしたれば

まちの灯は青く見え

らんかんは夢みたり

又、鳥そらの方に鳴きて

川水鳴りぬ、これはこれ

まことのやみの灰いろなり

とあり、これも本作と無関係ではあるまい。また、「（冬のスケッチ）」の第三二葉には、「黒くもの下から／少しの星座があらはれ 橋のらんかんの夢、／そこを急いで その黒装束の／脚の長い旅人が行き／遠くで川千鳥が鳴きました」、「そら中にくろくもが立ち／西のわづかのくれのこり／銀の散乱の光を見れば／にはかにむねがをどります」という部分があり、さらに第三三葉には、「川が鳴り／雲がみだれ／ぬかるみは／西のすこしの銀の散乱をうつす」、「こめかみがひやつとしましたので／霰かと思つて急いでそらを見ましたら／丁度頭の上だけの雲に穴があき／さびしい星が一杯に光つて居りました」とある。

一つの実体験を様々にパラフレーズしたのか、それとも似通ったことを何度も経験していたのかわからないが、村上英一（前掲）が言うように、賢治は本作のような「錯覚」を好んで作品にしている（例えば「光る山」を「海」だと錯覚した「高原」、「虹」を「火事」だと錯覚した「報告」など）。しかし、本作に限っては、改稿の過程を丁寧に見ていくと、「作品の主題が、錯覚の面白さや詩情から、錯覚に対しても全く無感動な、屠者たちの倦怠感、疲労感へと移って」おり、「その背後にあるもの」、すなわち「屠者という職業に対する世間の偏見や、生物を殺す仕事自体の辛さ」に重点が移っていることが確認できると村上は続けており、その通りだと思われる。

生き物が生きていく限り他の動物の命を奪わなければいけないという問題が、賢治にとつていかに重要であったかは、「よだかの星」や「フランドン農学校の豚」、「なめとこ山の熊」、「ビヂテリアン大祭」などを読めば明らかであろう。また、肉食を嫌った賢治が残した数々のエピソードも、広く知られているところである。

ただ、賢治が動物たちをほふることを生業にしている人々を、直接的に非難してはいなかったことについては注意を喚起しておく必要がある。例えば、「なめとこ山の熊」の小十郎は、熊を撃ち殺すことを生業にしながらも、「なめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのだ」とされていた。むしろ賢治が批判したかったのは、熊を獲る危険を冒すことがないばかりか、命がけで熊と闘う小十郎たちから金品等を搾取している町の旦那たちであった。

そう考えてみると、本作においても賢治は「屠者」を批判する意図はなく、彼らにそうした生業をさせながら（賢治は小十郎に「ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまつたし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞするんだ」と語らせている）、時に差別的な眼差しで見つめ、自らは食肉や皮を利用して彼らの恩恵を蒙っている町の人間たちに批判の矛先が向いていたということになるのかもしれない。これは賢治が「酒」を嫌いながらも、密造酒を愛する農民たちに肩入れし、彼らを取り締まり、税金の取り立てに躍起となる側をどこか冷めた目で見ていたのと似た構造を見て取ることができそう。

「屠者」とは、延喜式（延長五年・九二七年）に、「およそ鴨御祖社南辺は、四至の外にありといへども、濫僧・屠者、居住するを得ず」と書かれていることからわかるとおり、平安の昔から差別的な眼差しで見られる存在であった。こうした眼差しが現代にま

